

イエスのことば 第4回

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを、あなたがたはいまに見ます。」(ヨハネ 1:51)

□文脈の確認

1. メシアはユダヤ人の王として来る(マタ 2:2)。そしてメシアの王国では、ユダヤ人のみならず、全世界を治める。
2. イエスをその王であると神が認めたことを確認する記事が3つある。第一にイエスがヨルダン川で先駆者ヨハネから洗礼を受けたときに、聖霊なる神が鳩の姿で現れ、父なる神の声が天から響いたこと、第二にイエスが荒野でサタンの誘惑を受けてこれを退けたこと、第三に先駆者ヨハネがイエスをメシアであると証言したこと、この3つである。
3. 本日の「イエスのことば」は、イエスが王であると認められた第三の出来事、先駆者ヨハネがイエスをメシアであると証言したことと関連している。
 - ① 先駆者ヨハネの証言に従い、ヨハネの二人の弟子たちがイエスに会いに行った。その一人であるアンデレは、彼の兄のシモン(ペテロ)をイエスに紹介した。
 - ② その翌日、イエスはピリポに声をかけた。
 - ③ ピリポは、友人のナタナエルをイエスに紹介した。
 - ④ このようにして、初期の弟子たち5人がそろった。
 - ⑤ 本日の「イエスのことば」は、初期の弟子たちとの対話の中で、イエスが語られたことばである。

□アウトライン

A) 先駆者ヨハネによる証言

1. 指導者たちに対するヨハネの証言(ヨハネ 1:19~28)
2. イエスを指しての、ヨハネの証言(ヨハネ 1:29~34)

B) 初期の弟子たちの信仰

1. 最初の5人の弟子たち(ヨハネ 1:35~46)
2. ナタナエルといちじくの木(ヨハネ 1:47~51)

□A) 先駆者ヨハネによる証言

1. 指導者たちに対するヨハネの証言(ヨハネ 1:19~28)
 - (1) メシア運動が起きたときに、ユダヤ議会サンヘドリンが行う調査は、観察・審問・判定の3つの段階で進めることになっていた。
 - ① マタイ 3:7~12では観察段階であった。調査団は、ヨハネが人々に洗礼を授

けている場所に来て、ヨハネの活動を観察した。観察段階では、調査団はヨハネに質問や反論などは、一切しなかった。

② ヨハネ 1:19~28 の記事では、調査団は質問をしている。調査は第二段階の審問に進んだことがわかる。

(2) 19 節 「ヨハネの証言は、こうである」。ユダヤ議会サンヘドリンの公式調査に対する先駆者ヨハネの証言である。

① 今回派遣されたのは「祭司とレビ人」

- 「祭司とレビ人」は、イスラエル 12 部族の中では、ともにレビ族に属する。エルサレムの神殿を運営する役割は、レビ族にだけ認められた。
- 祭司は、レビ族の中でも、アロンの家系に属する一族だけが担う職務である。神殿の中に入ることができるのは、祭司だけであった。
- 神殿の中は、隔ての幕で二つの部屋に仕切られていた。入り口から入った手前の部屋と、幕の向こう側の奥の部屋の、二つの部屋であった。奥の部屋は「至聖所」とも呼ばれ、大祭司が年 1 回入ることを許された。
- 福音書の中には、「祭司長たち」という人々が登場するが、彼らは大祭司ではない。大祭司は祭司の中では、ひとりだけ。祭司長とは、祭司の組が 24 組あり、それぞれの組の長である。
- ユダヤ議会サンヘドリンの議長は、大祭司が務めた。「祭司とレビ人」は、一般的にはユダヤ教サドカイ派であった。福音書の中では「サドカイ人(びと)」として登場する。
- 当時のユダヤ教の主要教派は、パリサイ派とサドカイ派の二つ。福音書の中で、「律法学者」、「町の長老たち」と呼ばれる人々には、パリサイ派が多かった。福音書の中では「パリサイ人(びと)」として登場する。
- ユダヤ議会サンヘドリンのメンバーも、サドカイ派とパリサイ派で構成されていた。多数派はパリサイ派であったが、議長である大祭司はサドカイ派であり、神殿の運営を掌握するサドカイ派の発言力は大きかった。
- パリサイ派とサドカイ派の違いは、復活を信じるかどうか。サドカイ派は、「復活はない」と主張していた(マタイ 22:23)。

② 彼らは、22 節では、「私たちが遣わした人々に返事をしたい」と言っている。遣わした人々とは、ユダヤ議会サンヘドリンであり、指導者たちである。指導者たちは、第一段階の観察における報告を受けて、ヨハネの活動を軽視できないと判断し、第二段階の審問に進むこととし、調査団を送った。

③ 彼らは、24 節では、「パリサイ人の中から遣わされたのであった」と記されている。この訳では、遣わされた「祭司とレビ人」がパリサイ派であったということになるが、直訳すると「パリサイ人から遣わされた」である。第二段階の審問に進むことにしたのは、パリサイ派が推したと解される。

- (3) ヨハネは、「私は、〇〇ではない」と3つの否定証言をした。
- ① メシア・・・20節「私は、キリスト（メシア）ではありません」
 - ② 預言者エリヤ（マラキ4：5）・・・21節「そうではありません」
 - ③ あの預言者（申命記18：15～18）・・・21節「違います」
- (4) 22節 調査団は、ヨハネに答えを求めた。「あなたはだれですか。自分を何だと言われるのですか。」
- (5) 23節 ヨハネは、イザヤ40：3を引用して答えた。「私は、預言者イザヤが言ったように、『主の道をまっすぐにせよ』と荒野で叫んでいる者の声です。」
- ① このことばは、ヨハネが自分をメシアの先駆者である、イスラエルの王が来ることを先触れする者である、とする内容である。
 - ② 先触れの役目は、王が通る道の障害物を取り除かせる、穴を埋めるなど道を補修するなど。それが『道をまっすぐにせよ』と叫ぶ」ということ。
- (6) 25節 調査団は、「メシア本人でもない、預言者エリヤでもない、モーセのようなあの預言者でもないとしたら、なぜ、あなたは洗礼を授けているのですか」と尋ねた。
- ① この質問は、ヨハネの資格を問うものである。
 - ② 裏を返せば、ヨハネが説く教え、そして洗礼を授けるという運動が、いかに当時の人々に大きな影響を与えていたかを示している。
- (7) 26～27節 調査団のこの質問に対するヨハネの応答は、3つの内容から成る
- ① 私は水で洗礼を授けているが、メシアがする洗礼とは比較にもならない
 - 「メシアは聖霊と火とのバプテスマを授けるお方である」（マタイ3：11）
 - 第一段階の観察のときの調査団に、ヨハネはすでにこのことを語った。
 - ② そのお方は、あなたがたの中に立っておられる＝メシアはすでに来ている。
あなたがたはまだ、その方を知らない。
 - ③ その方は私のあとから来られる方で、私はその方のくつのひもを解く値打ちもない【同じことを、マタイ3：11、第一段階の観察のときの調査団に、ヨハネはすでに語っていた】
- (8) 28節 この出来事があった場所 ヨルダン川の東側の岸にある町ベタニヤ
- マルタとマリヤの姉妹、その兄弟ラザロが住んでいたベタニヤとは別。
こちらは、ヨルダン川の岸近くではなく、エルサレムから3キロメートルほど離れた所（ヨハネ11：1、18）

2. イエスを指しての、ヨハネの証言（ヨハネ1：29～34）

- (1) 29節 その翌日、ヨハネは自分の方にイエスが来られるのを見た
- ① 調査団の審問に答えた日の翌日
 - ② イエスが、ヨルダン川東岸のベタニヤに来た。このときのイエスは、荒野で

の誘惑を終えて戻ってきたとき、40日の断食のあとである。

(2) 29～34節 ヨハネの証言

- ① 29節 見よ、世の罪を取り除く神の小羊（過越の羊、イザヤ53章の羊）
- ② 30節 私が言っていたのは、この方のことである
- ③ 31～33節 私もこの方を知らなかった。しかし、「御霊がある方の上を下って、その上にとどまられるのがあなたに見えたなら、その方こそ、聖霊によってバプテスマを授けるお方である」という神のお告げを受けていた
- ④ 34節 私はそれを見た。それで、この方が神の子であると証言している。

□B) 初期の弟子たちの信仰

1. 最初の5人の弟子たち（ヨハネ1:35～46）

(1) この箇所期間は、2日間。一日目は・・・

- ① 35節 「その翌日」という言葉で始まる。先駆者ヨハネがイエスを指してメシアであると証言した日（ヨハネ1:29～34）、その日の翌日である。
- ② この日、先駆者ヨハネは二人の弟子たちといっしょにいた。そこにイエスが歩いて来た。ヨハネは二人の弟子たちに言った。「見よ、神の小羊」（36節）
- ③ この二人の弟子たちとは、ゼベダイの子ヨハネと、シモン・ペテロの兄弟アンデレであった。ゼベダイの子ヨハネの名はここには記されていない。この福音書を記した本人だからである。
- ④ 37節 二人の弟子たちは、先駆者ヨハネの言葉を聞いて、イエスの後を、少し距離を置いて、ついて行った（37節）
- ⑤ 38節 イエスは振り向いて、二人がついて来るのを見て、言われた。「あなたがたは何を求めているのですか」 彼らは質問をもって返した。「ラビ、今どこにお泊りですか」 39節 イエスは答えた。「来なさい、そうすればわかります。」
- ⑥ ゼベダイの子ヨハネにとって、イエスとの最初の出会であるこの日は、特に重要な日であったことが、39節で時刻まで記述されていることに表れている。39節 そこで彼らはついて行って、イエスの泊まっておられる所を知った。そして、その日、彼らはイエスといっしょにいた。時は十時ごろであった。・・・ユダヤ時間であれば、夕方の午後4時ごろ、ローマ時間であれば、朝の午前10時ごろ
- ⑦ アンデレにはシモンという兄がいた。41節 アンデレは兄を見つけると、「私たちはメシアに会った」と伝え、兄をイエスのもとに連れて来た。イエスはシモンに目を留めて言われた。「あなたはヨハネの子シモンです。あなたをケパ（訳すとペテロ）呼ぶことにします。」・・・シモンはヘブル語の本名である。イエスは彼を、アラム語で岩を意味するケパと呼ぶことにした。ケパは

ギリシヤ語では「ペテロ」となる。

- ⑧ かくして、ゼバダイの子ヨハネ、アンデレとペテロの兄弟、合わせて3人がイエスの弟子となった。これが1日目であった。

(2) 二日目は・・・

- ① 43節 「その翌日」、イエスはユダヤ地方を去って、ガリラヤ地方へ向かうこととなった。このとき、イエスはピリポを見つけて、彼に「わたしに従って来なさい」と言われた。かくして、ピリポが4人目の弟子となった。

- ② 44節 ピリポは、ガリラヤ地方のベツサイダという町の出身であった。アンデレとペテロも同じ町の出身であった。

- ③ 45節 ピリポは、5人目となる弟子、友人のナタナエルを連れて来た。彼はナタナエルに伝えた。「私たちは、モーセが律法の中に書き、預言者たちも書いている方に会いました。ナザレの人で、ヨセフの子イエスです。」 ナタナエル自身もガリラヤ地方の出身であったが、ナザレという町には低いイメージを持っていたようである。彼は答えた。「ナザレから何の良いものが出るだろう。」 確かに当時のユダヤ人の間では、メシアがナザレのような場所から出ると言うなら、非常識であるとされたのである。ナタナエルだけではなかった。これに対してピリポは、議論をせずに、ただ次のように答えた。「来て、そして見なさい」

2. ナタナエルといちじくの木 (ヨハネ 1: 47~51)

- (1) 47節 イエスはナタナエルが自分のほうに来るのを見て、彼について言われた。「これこそ、ほんとうのイスラエル人だ。彼のうちには偽りが無い。」

- (2) 48節 これを聞いて、ナタナエルはイエスに言った。「どうして私をご存じなのですか」・・・ナタナエルにしてみれば、イエスとは初対面である。どうして、自分を「ほんとうのイスラエル人」、「彼のうちには偽りが無い」と言うことができるのか、理解できなかった。

- (3) 48節 イエスは答えた。「ピリポがあなたを呼ぶ前に、あなたはいちじくの木の下にいた。わたしはそれを見た」

- (4) 49節 これを聞いたナタナエルは言った。「先生。あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です」・・・このナタナエルの応答は、どういうことか？ いちじくの木の下にいたところを見られたからといって、どうしてイエスを神の子、イスラエルの王であると呼ぶのか？

- (5) この対話を理解するためには、文脈を把握しなければならない。

- ① まず、イエスは、ここではあえてナタナエルという名を呼んではいない。「これこそ、ほんとうのイスラエル人だ」と言って、「その人のうちには偽りが無い」と付け加えた。

- 「イスラエル人」で「その人のうちには偽りが無い」と言えば、その第

一人者は、イスラエル民族の始祖ヤコブである。ヤコブは、「穏やかな人」（創世記 25：27）であり、伯父のラバンに忠実に 20 年間仕えた（創世記 31：36～42）。そして最初に「イスラエル」と呼ばれた人である（創世記 32：28）。

- ② 次に、イエスは、「ナタナエルがいちじくの木の下にいるのを見た」と言った。当時は、印刷技術もない時代、聖書を各自が持つことなどできなかった時代には、ユダヤ人たちはかなりの時間をかけて聖書を暗記した。そして学んだ聖書箇所について思いを巡らした。当時のラビたちが、そのような瞑想の場所として推奨したのが、「いちじくの木の下」であった。

- いちじくは、果実を一斉に成らせるのではなく、ひとつ、またひとつと成っていくので、毎日少しずつ食することができる。同様に、神のことばも毎日少しずつ学び、暗唱していく。

- ③ ナタナエルは、イエスから「これこそ、ほんとうのイスラエル人だ。その人のうちには偽りが無い。」と言われ、次に「あなたがいちじくの木の下にいるのを見た」と言われたとき、自分の心の中にあったことを言われたのだと、すぐにわかった。

- ナタナエルは、いちじくの木の下で聖書のある箇所を瞑想し、心の中で思い巡らしていた。創世記のヤコブの記事を暗唱し、それを瞑想していたのである。ナタナエルは、ヤコブについて、「これこそ、ほんとうのイスラエル人だ。この人のうちに偽りは無い」と思いを巡らしていたのである。

- (6) イエスは、ナタナエルが創世記のヤコブの記事を瞑想していたことを、あらためて示すことばを語る。51 節 「まことに、まことに、あなたがたに告げます。天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを、あなたがたはいまに見ます。」

- ① 創世記 28:12 天使たちが上り下りしているのを、ヤコブが見たという記事。天が開けて、天使たちが天と地上の間を上り下りするという記事は、聖書の中では、ここだけである。
- ② イエスのことばの中では、天使たちは「人の子の上」を上り下りする。人の子は、メシアの呼称のひとつである。神一人であるメシアの人性を強調するタイトルである。天使たちがメシアの上を上り下りするとは、メシアが地上にいるということである。
- ③ この情景は、メシアの王国の預言である。地上にメシアの王国が立ち、メシアが王としておられる。
- ④ 天が開け、天の神の御座と地上のメシアの王座との間を、天使たちが上り下りするのである。